

## 坂口禊子と植民地台湾における「受容」と「排除」をめぐる

王 姿 雯

### 一、「春秋」<sup>(1)</sup>と「鄭一家」<sup>(2)</sup>

坂口禊子は一九一四年に熊本県八代に生まれ、一九三八年に台湾に渡り、台中の北斗小学校で勤務を始めた翌年、坂口は気管支炎のため入院し、退職して故郷の熊本に帰ることになったが、一九四〇年に結婚のため、家族の反対を押し切り再び台湾に戻ってきた。そして一九四一年、彼女は「台湾時報」編集長の植田富士太郎から作品執筆を依頼され、四月と九月に「春秋」と「鄭一家」との二作品を同誌に発表した。坂口は戦時中の台湾文壇で活躍した有数の日本人作家にして女性作家だといっても過言ではあるまい。

「春秋」は日本人農業移民の物語である。主人公の順は妻の加代を連れて台湾に渡り、現地で土地を分配され新生活を始める。順と加代は故郷をしのびながら、台湾の土地で懸命に生きていくが、台湾に慣れない加代は流産してしまう。一方、内地出身の教師雪子は順の村の小学校に務めており、移民の貧しい生活をみて、移民とその子供たちに対して哀れみの気持を持っている。日本にいる順の母は休みに故郷に帰ってきた雪子先生から息子の生活を聞いて、はじめに嫁の病身であることを知り、嫁のために雪子先生と一緒に台湾に渡り、現地生活にも次第に慣れるが、台湾に鎮守様

がないことを嘆き続けている。

これに対して、「鄭一家」は台湾士大夫階級の鄭氏一家の物語である。鄭家の家長の朝は皇民化運動に賛同し、自分も日本人になるべく頑張っていたが、急逝してしまう。息子の樹虹は父親の遺言に従い日本式の葬式を行なおうとするが、母の玉が激しく反対したためあきらめる。樹虹は日本人妻の小夜は末娘を産んで死去したため、樹虹は台湾人後妻の翠霞を迎える。日本に留学している樹虹の息子の樹一郎は、祖父の葬式のために台湾に戻ってきたが、台湾式の葬式に対して不満を抱き、日本には「八紘一宇」の精神があり、いつか台湾の習俗が日本化されると考えている。

戦前から戦後にかけて、坂口の評論は殆ど「鄭一家」に絞っている。昭和一七年に楊達は「台湾文学問答」<sup>(3)</sup>を発表し、次のように坂口を語っている。

(前略) 皇民運動こう云う人物を作つてなれりと云うならば、これは大いなる誤算である。誠実感、正義感なくってなんの皇民であろう！何の新体制であろう！これは文学の問題だけでなく、政治的に云つても重大なる課題である。僕は当事者がこの点に意を用いられぬことを望む。

作品について云えば、幾多の不満はあるにしろ、この「鄭一家」を斯く迄まとめ上げ、そして、斯く迄描破した、弱々しい坂口櫛子氏の根気強さと誠実さに僕は敬意を表する……<sup>(4)</sup>

楊達の発言に対して、一九七一年に出版された『旧植民地文学の研究』<sup>(5)</sup>において、尾崎秀樹は「これらの言葉のうちひそませた楊達の真意（『皇民化』批判）を正しく読みとる必要がある」と示唆する。また、一九九五年に出版された『台湾の日本語文学』において、垂水千恵も楊達の発言について、次のように論じている。

この発言が『文芸台湾』の西川満を意識したものであると取っても、あながち深読みともいえない。『台湾文学』が西川に代表されるような『文芸台湾』の御用文学性を嫌い、台湾リアリズムを標榜して独立した経緯を考えるならば、坂口梧子の本来の資質が『台湾文学』同人への道を準備していたと言つていいだろう。<sup>(6)</sup>

『台湾文学』という雑誌は「台湾意識の強い、台湾人中心の雑誌」<sup>(7)</sup>であり、さらに坂口は『台湾文学』で「代表的作家」の一人だと垂水是指摘している。<sup>(8)</sup>

楊逵から尾崎を経て垂水に至って、「台湾意識が強い」、「日本政策（皇民化運動）を批判している」という坂口の評論は定着してきた。しかし、坂口の作品に「帝国抵抗」しか読めないだろうか。「帝国抵抗」の読み取りで「春秋」という日本移住民の物語と「鄭一家」という台湾氏族の物語の間にあるつながりは簡単に見出されないと思われる。

ところで、「春秋」も「鄭一家」も共に一九四一年『台湾時報』に掲載されており、同年二月から十一月までの同誌「編集メモ」を見ると、「南方」が強く意識されていたことがわかる。それは毎回の特集テーマからも窺われ、二月号は「撮影と報告 泰国の現実」、三月号は「台湾の防衛」、四月号は「移民政策とその限界」、七月号は「海南島の現貌」、九月号は「情勢緊迫下の台湾」の特集であり、「南方」との関係を意識しながら編集されていたと考えられる。<sup>(9)</sup>さらに、六月の特集は「皇民奉公会への希望」であり、一見「南方」とは無関係に見えるが、同月号編集メモには「台湾奉公会は台湾政治から南方政治に躍進する一つの地がためとならう」と書かれている。<sup>(10)</sup>そこからは、皇民奉公会が「南方政治に躍進（傍点筆者）」するため結成され、「南進」が皇民化運動の最終目的だという考えが読み取れよう。八月号で特集テーマはないが、『南進政策』私見』という題名の文章を掲載しており、ここで明確に「南進政策」というテーマが語られ、翌々月の十一月号は、特集「南進基地論」を組んでいるのである。<sup>(11)</sup>

このような一連の「南方」をめぐる編集は、一九四一年に戦争が激しくなったことを示す一方、南進政策を支持しな

から皇民化運動を發展させようとし、同誌編集部の方勢を示すものである。「春秋」も「鄭一家」も『台湾時報』編集長植田富士太郎の依頼で書かれて、同誌に掲載されたものであり、ゆえに、両作もある程度『台湾時報』の編集方針を意識しつつ、「南進」という文脈の下で書かれたと言っても過言ではないだろう。

この二作品に共通するもう一つの特徴は、登場人物の出身地の「単純化」であろう。「春秋」は「台中農業民をテーマ」にした作品であり、日本農業移住民を物語の主人公として設定している。日本人の順は土地を求めるために、妻を連れて台湾に渡った。そして、順の母は「嫁の妊娠と、嫁の病身」を心配し、雪子先生と共に夏休みが終わって一緒に台湾に渡った。一方雪子は台湾出身でもなく、農業移住民でもなく、新しい人生を求めるために台湾に渡って日本から小学校の教師になった。このように、「春秋」に登場する人物は全員日本出身者といえよう。一方、「鄭一家」は台湾氏族三代の物語である。鄭朝が第一代の家長であり、鄭朝が亡くなった後に家を継いだのは樹虹である。樹虹の息子の樹一郎は混血だが、台湾人の父の血を継いで台湾の家庭に生まれ、戸籍上でも台湾人といえよう。「台湾人家庭」をテーマとするがゆえに、主人公は全員台湾出身者に設定されると考えられる。

登場人物の出身地の「単純化」に伴い、作品の中でもう一つの出身地グループが強引に消された点も指摘できよう。「春秋」で登場する台湾人は苦力でしかない。苦力については「除草と施肥を、本島人の男を雇ってやらせる」という描写しかみられない。このような本島人も「観念的」に描かれ、個性的な一人の「人間」として登場することはない。一方、「鄭一家」では、二代目樹虹の妻小夜は日本出身ではあるが、彼女は「無口」な役に徹しており、混血の樹一郎・球子・路子・阿紀子を産み、そして長男の樹一郎が中学の時に「ホロホロと散るやうに逝つて」、物語から消えているのである。

このように、日本移住民物語の「春秋」で主人公は全部日本内地の出身者である一方、「鄭一家」は台湾人鄭家の物語である。それでは、なぜ坂口は日本人の物語と台湾人の物語を連続して描いたのか。また、「春秋」の日本人と「鄭

「一家」の台湾人はそれぞれ「台湾」という土地でどのような物語を展開していくのか。また、主人公の「単純化」は、「春秋」と「鄭一家」という物語の展開にどのような影響を与えているか。本稿はこの二つの問題に焦点を当てて考えてみたいと思う。

## 二、農民意識と失われた信仰

### 二― 順の「百姓魂」

「日本人」だけの物語「春秋」において、なぜ日本人は台湾に渡るのだろうか。日本は順にとって、「大きい、温かい、広い、最も自分等を平和と安息とに保つてくれた故郷」である。しかし、この「大きい、温かい、広い」故郷日本は実は「限られた狭い土地」であり、「祖父母から父母へ、そして孫へと持続してゆく土地であるが、傍系の者が土地の分前に与る事は少なかった」のであった。

順は長男ではなく、山本家の長男は故郷の熊本にいる。<sup>(13)</sup> 実際、日本の農家には、長男が家を継ぐ習慣がある。酒井惇一は日本農家の相続習慣について、次のように述べている。

わが国の農家は、直系家族が家（家名、家産）と農業経営を同時に受け継ぐことでこれまで維持されてきた。一般的には長男が継承し、男子がいなければ長女に婿をとり、子供がいなければ血族から養子を迎えて家と経営を引き継がせてきた。<sup>(14)</sup>

長男に継承されるのは権力と義務であるため、長男は職業を選択することができなかった。長男以外の子弟は、分家などの特別な事情がなければ、自ら農業を営むこともできなかったという。分家すると自ら土地を購入し農業を営むこ

とができるが、土地購入には困難があるため、親族や近隣から土地を借りるのが普通だという。<sup>(15)</sup> それだけではなく、酒井の指摘しているように、「開拓入植政策など土地が与えられる場合以外、農業への新規参入は抑制された」<sup>(16)</sup> のである。日本は「限られた狭い土地」でありながら、「祖父母から父母へ、そして孫へと持続けてゆく土地であるが、傍系の者が土地の分前に与る事は少な」い。このような日本の習慣や状況からみれば、順が渡台する理由が見えてくる。

順が台湾に來た動機は「何故外に土地を求めないのだ。彼等土地を持たぬ者へ手招いてゐる、広い土地の呼声が聞えないのか」という考え方であつたろう。「開拓入植政策」は順に土地を与え、「農業への新規参入」のよい機会を与えるのである。つまり、日本で生活の困難に直面していた順にとって、植民地の「新天地」は希望であつた。それ故、順は「新天地」を開墾することを決意し、家族を連れて本島まで來たのである。

台湾移民問題は、当時はそれほど大きい関心と呼んでいないが、それでも「春秋」掲載誌の『台湾時報』一九四一年四月号は評論欄に「移民国策とその限界」<sup>(17)</sup> という論を載せている。「移民国策とその限界」は、移民による人材流失、移民場所の適性、移民のための高額の出費、所得が出費より低い、などの点を指摘して移民政策の限界を示している。移民問題を語る小説「春秋」は論文「移民国策とその限界」と同一号に掲載された点は興味深い。

さらに、『台湾時報』一九四〇年から一九四五年までの六年間に「移民」特集は、一九四一年四月号のみであつた。また評論に限っても、一九四〇年から一九四五年の六年間に、「日本農業移住民」<sup>(18)</sup> に関する専論はこの「移民国策とその限界」のほかに、一九四一年九月号掲載の「東亜共栄圏と南方移民」<sup>(18)</sup> 一編を数えるのみである。ちなみに、同誌一九四一年九月号のテーマは「南方情勢緊迫下の台湾」であつた。

このように『台湾時報』では移民政策の限界が指摘される一方、『日本人海外活動に関する歴史的調査』は、昭和五  
年までの各産業における内台人数の割合を次の表で示している。<sup>(19)</sup>

さらに、この表をめぐる、『日本人海外活動に関する歴史的調査』では次のように分析している。

	明治 35 年 (1905 年)		大正 14 年 (1915 年)		大正 9 年 (1920 年)		昭和 5 年 (1930 年)	
	内	本	内	本	内	本	内	本
総数	1.9	97.8	3.9	95.6	4.5	94.9	5.0	93.9
1. 農業	0.1	99.9	0.4	99.6	0.4	99.6	0.4	99.5
2. 水産業					4.8	94.2	8.2	90.6
3. 鉱業	8.4	88.0	12.9	83.0	6.7	90.9	3.2	91.8
4. 工業					12.8	82.0	9.3	83.3
5. 商業	8.6	88.0	13.3	82.0	13.4	82.5	9.8	84.1
6. 交通業					16.5	77.7	17.1	77.8
7. 公務自由業	38.6	61.0	46.0	53.3	49.5	49.5	42.1	56.9
8. 家事使用人	1.0	98.6	2.3	96.8	2.7	95.0	11.5	84.7
9. 其他産業					0.3	98.8	2.6	95.8
10. 無業	1.5	98.5	3.9	96.1	4.4	95.2	4.9	94.4

各年を通じ農業に於ける本島人割合は絶対多数を占めている。勿論日本内地よりの農業移民として花蓮港廳下其の他台南台中各州下等若干の土着化した内地農業移民があるが、本島人割合の絶対的高さの中に飲み込まれたかの観がある。<sup>20)</sup>

換言すると、昭和五年まで、内地人が台湾で農業を営む人数の割合は○・一から○・四まで増加するようになったが、それでも本島人と比べて極めて少数である。逆に、「公務自由業」における内地人の割合は五〇％弱であり、内地移民の中で、公務員がしめる割合の高さは容易に想像できるだろう。

「春秋」の主人公の順も上述のような産業人口偏差に気付いていた。「すでに早くから移住して来てゐる内地人の多くが、官公吏であり、教員であり商人で」あるからこそ、彼等には「一つの内地人としてのポーズが出来てしまつ」たのである。官公吏、教員、商人らと違い、順は自分が「農民」としての移民だと意識している。「農民」として台湾にやってきた順から見ただけで、官公吏・教員・商人らは、「一つの内地人としてのポーズ」を持ち、彼が「農民として地についた仕事をしてゆく上には、そのポーズを乗り越える勇気がいった」。順にとって、その「内地人としてのポーズ」を乗り越える方法は自ら畑

に足を入れることである。が、村の人々は、『内地人が苦力の仕事をしてみると、笑はれる』と、体面問題だと、真面目になつて順をいましめ」て嘲笑した。この順を嘲笑したり戒めたりする村の人々も、農民でありながら、内地人としての「体面」の問題を考え、官公吏・教員・商人と同じく、「内地人としてのポーズ」を持っていると言えよう。

順は村の人々に笑われるだけではなく、本島人の厳しい視線も受けている。順の観察によれば、本島人は常に、「内地人」を一つのタイプにまとめて考へる癖が出来て」おり、「移民達が本島人の最もいとふ労働をする」ことに對し、「自分達と同じ人であると言ふ親愛を感じる」どころか、「侮蔑と嘲笑をあげせかける」のである。

村人と本島人の嘲笑に對して、順は「田に入らない百姓は、百姓ぢやないんだ。俺は、台湾に内地人の百姓魂を植付けた来た」と考へている。順からみれば、「農業は苦力にまかして、自分達は、別な仕事を求めるような」ことは、移民本来の使命を逸しており、「移民本来の使命」とは「内地人としてのポーズ」を持つことではなく、その「ポーズ」を捨て自ら田に入ることによつて「内地人の百姓魂」を台湾に植え付けることなのである。

自ら畑に入る順は次のように村民に訴えてもいる。

この荒れた土地を、育てあげてゆき、此処から、幾らかでも増収する事を考へ、努める事が、我々百姓の御奉公である。皆、熟練した百姓の腕を持つてゐるのではないか。水田に入れ、自ら苗を植ゑろ、草もとれ。

ここでは、順が自分を単純なる「農民」ではなく、「百姓」の「農民」であると意識している点に注目したい。自分が「百姓」としての義務を果たすことを強調する順は、自らを日本国民であり、耕作と増収は農民としての「御奉公」であると感じている。「田に入らない百姓は、百姓じゃないんだ」という言葉から、「畑」に入ることが「国民」としての実践だ、という順の国民意識が見られる。言い換えれば、順は「国家」を意識しながら国民として農業に従事して



おり、「農民としての日本の百姓」こそが順のアイデンティティだといえよう。順は「耕作」という「労働」を通じて、日本百姓としてのアイデンティティを形成しているといえよう。

順が植えるのは植物であるが、「耕作」という国民アイデンティティ形成行為を通して、「百姓魂」という日本アイデンティティをも台湾の土地の上に移植しようと努める。「植民地」という「荒れた土地」を祖国のような「豊穰」な土地に育てることは、順にとって、「農業移住民」としてのアイデンティティ形成の行為であろう。

さらに、順は自分の「百姓魂」の根だけを台湾の土地に下そうとしているのではない。上述のように、順は耕作が農民としての国民的使命だということを村民に訴える。順の言葉は「訥訥として雄辯とは程遠いものであった」が、「その地に足をつけてゐる、順の心の底に根を下してゐる信念は、村の人々の魂をゆすぶった」のである。順の「百姓魂」が台湾の土地に注がれる一方、他の村民に影響し、「百姓魂」は周りにも広がっていく。

順が「百姓魂」を植えると、彼の水田は「外の田に比して増収であり、良い米がとれる」ようになる。順は耕作という労働を通して台湾の土地に「百姓魂の植え付け」である。すなわち「日本国民性の植え付け」て外の田に比べて「増収」であることは、順が植えつける「日本百姓魂」が台湾の土地で開花し、日本と台湾との融合を促進したことを示しているが、それは相互融合ではなく、台湾を日本に同化することであつたのだ。

## 二―二 順の母の「信仰」への渴望

順が百姓魂を台湾の土地に植えつけようと努力している時、彼の「健気な老母」は「嫁の妊娠と、嫁の病身を知ると、敢然として、息子夫婦のもとへ」やって来た。順の母は旅の疲れにも負けることなく、台湾に「着いた日の翌日から働き始めた」。畑の仕事を手伝いながら、順の母は「内地との季節の違い」を、ただ「成程とうなずく」のだ。一見、台湾の生活に順調に順応していくように見える順の母だが、だんだん「自分の心の中に、何か満ち足りないものがある事

をつくづくと思う」ようになる。順が故郷の収穫の祭りを回想しつつ、「妙見さんと、八幡さんが、つづいてありますね」と言うと、順の母は「耐へ性もなく涙をこぼして」しまうのだ。

順の母の涙がこぼしてきたのは、「鎮守様がないから、さびしくてたまらん」からだ、実はこの村にも神社やお祭りはある。それはF神社であり、祭りは「十一月〇日は、F神社の祭礼」である。

鎮守様と言えば、能久親王が当時の台湾の鎮守大神として祭られていた。周知のように、能久親王は北白川宮第二代、伏見宮邦家親王の第九王子で、領台当初に、疫病のため台南で亡り、<sup>(21)</sup> 当時の人々に衝撃を与えた。能久親王のように外地の戦場で皇族軍人が病没するのは異例からである。菅浩二の説によると、当時の日本人に対して、「親王の御生涯は、<sup>(22)</sup> 記紀における日本武尊の姿―東国西国に出征し最後には病に覺ずる―を想起させ」、さらに、「早くも能久親王の国葬前後より、台湾の総鎮守たる神社を創建し、いわば〈現在の日本武尊〉として親王を奉斎しようという運動が起き」、<sup>(23)</sup> 台南官幣大社と官幣中社などの官幣神社で能久親王を祀ることになった。能久親王の死を記紀の神話と結びつけ、〈現在の日本武尊〉として見なすのは、植民地で歿した皇族の神格化を通して、「日本精神」を謳歌し日本帝国主義を賛歌することを示している。この点から見れば、能久親王の祭祀は政治的な意味を持っていると言える。

また、当時の植民地において能久親王のようにその地域全体の祭神となる例は極めて少ないという。本康宏史の考察によると、植民地で皇族を祭る例は、能久親王のほかに、蒙疆で亡くなった北白川宮永久王しか見られない。北白川宮永久王は当時の蒙疆参謀であり、演習中死亡した故に、昭和一六年に蒙疆神社に祀られることになった。が、能久親王のように、地域全体の祭神になったのではない。<sup>(24)</sup> 能久親王のように、「そうした祭神がその地域全体の祭神とされたのは台湾だけ」である故に、「他地域の海外神社と比較しても、台湾の神社が極めて政治性の高い神社であった」<sup>(25)</sup> と本康は示唆している。このように、能久親王を鎮守様として祭ることは、国家が台湾植民地統治のために作り上げた「信仰」である、という政治的意味が強いと思われる。

このように台湾にはF神社があり、「十一月〇日は、F神社の祭礼」があり、能久親王という鎮守大神も存在する。しかし、順の母は「何か満たされぬもの、どうしても落着かぬ自分の魂の不安さ」を覚え、その「原因が、何であるか」ということを考えるうちに、「フト部落の周囲を見た時、其處には、信仰と安心の據り所であるお宮もお寺もなかった（傍点筆者）」ということに気付くのだ。現実の台湾にも、物語の台湾にも間違いなく神社があるのに、なぜ順の母は「信仰と安心の據り所」であるお宮とお寺がないという理由で寂しくなるのか。この点を理解するには、まず順の母がどのように「信仰と安心の據り所である」お宮とお寺を定義しているのか、という点を明らかにしなければならない。

鎮守様は順の母にとって「産れ落るとから今迄の六十何年かの生活の據り所」である。順の母の魂は「鎮守様を持つてゐた」のである。さらに、鎮守様は「老人達や子供が遊び場に、集り所にして慣れ親しむ内地の、大きい木が涼しい木蔭を作る」場である。それは、「今日もお祭りのあるF神社のような間遠い存在ではなく、もつと身近かに、毎日の生活にじかに来る魂の據りどころでなければならない」存在である。

このように、鎮守様はただの神社ではなく、生活の一部分や命の一部分であり、さらには、民衆の魂を預かっているところでもあるといえよう。このような土俗的神社は政府が政策的に作ろうとしても作れるものではない。能久親王やF神社はあくまでも官制の神様であつて、順の母の神様ではなく、彼女にとっては神社として十分に機能していないと考えられる。順の母にとって神社とは魂の抛り所であるとともに、彼女を内地の故郷に結び付けるものでもある。

台湾で「内地を戀しがり、内地へ歸りたがるのも、信仰を通してのつながりが此處にない」と考え、順の母にとって、信仰とは故郷に「帰る」ルートでもある。順の母が心の抛り所にできるのは故郷の鎮守様だけであり、故郷の鎮守様がいれば、故郷に居なくても故郷に帰っていると同様の気持ちでいられる。順の母が悲しむのは「神様も、故郷を離れた者の事は、次第にお忘れなさう」というのであり、植民地に故郷の神様はなく、故郷の神様も離郷者を忘れてしまうのである。順の母にとって、本当の神様は日本にあつて台湾になく、順の母のみならず、台湾の移住民たちは信仰を

失っているのである。鎮守様の信仰は故郷を想像させ、鎮守様が作り出す故郷の想像があれば、外地に行っても帰属感を持ち続けることができる。しかし順の母は台湾で鎮守様の加護を失ったため、故郷から切断される。順の母から見れば、鎮守様を失う事は故郷を失う事と同様なのであろう。

移住民は百姓魂を植え付け、「二代三代と住みつくに従つて、彼等の生活の根はひろがつて、動揺する事」はないかもしれない。しかし、「彼等の據り所を持たぬ魂」は、常に宙に浮いている。順とその母との描写から、移住民が住み慣れながら居住地に対する帰属感を得られないという移住民の悲しみも読み取れる。その悲しみは次のことを暗示しているようだ。「国民」の百姓魂が植民地に植えつけられたものの、故郷の鎮守様が不在であるために植民地にある「個人」の魂は内地「故郷」から切断され、抛り所を失ってしまう。ここからは「国民」と「個人」との間に生じた断絶を読み取ることができるのだ。

### 三、台湾式か日本式か

#### 三―一 葬式

「鄭一家」は鄭姓一家の物語であり、家長であつた鄭朝の葬式を中心に、玉（鄭朝の妻、樹虹の母）と新家長の樹虹（鄭朝の息子）との衝突が描かれている。鄭朝は生前に、皇民化運動実践のために力を尽くし、日本語を話し疊の屋敷に住み、息子を日本に留学させた。このような朝が亡くなる時に残した遺言は「萬事を内地式に」であつた。

しかし、鄭朝の妻、玉は伝統的な台湾式の葬式にすることを主張する。玉は伝統的な台湾女性であり、纏足もしている。玉は内地式に絶対反対し、樹虹の周りの街の人々も伝統的な台湾の葬式に賛成している。玉は「死んで土にかへつた人の事より、目前の供養の方が重大だと言ふ現実的な」態度で、「殯殮もなく、だしぬけにお墓へつれてゆかれて、それでいいと言ふの、貴方が親不孝の見本にされてもいいとお言ひなの」と樹虹を叱る。この玉の言葉から、玉が葬式

は親孝行の表現の場であるという台湾伝統的な考え方を持っていることが分かる。

実は朝の死に対して、玉は「朝より自分が先に死ぬべきであつた」という思いに捕われていた。もし自分が先に死んだら、「朝が内地式にはしなかつたであらうと言ふ自信があるのではないが」、遺言が「樹虹の言ふやうに絶対なものであれば、（中略）間違ひなく台湾式にやつてもらへる」であろう。実は玉が心配しているのは、樹虹の親不孝でもなく、街の人の視線でもなく、自分の未来の葬式なのである。玉は、「内地式を徹底的に拒むのではないが、自分迄は台湾従来の儀式でやつてもらへたい」と考えており、その気持ちこそが、玉が内地式に反対する最大の理由である。

なぜ、玉は「台湾従来の儀式」を挙げてもらいたいのか。それは日本式の葬式では火葬が行なわれるが、台湾の場合は土葬が主流であるからだ。朝が亡くなった直後、玉に頼まれて、王文という「道士」が樹虹のところに来た。朝が火葬されると聞き、樹虹に「大人を火葬になさるなんて、いけませんでしたね。大人は、火鬼になられるかもしれませんぞ。火鬼。大へんです」と言つた。それは、もし火葬されたら、輪廻できず、永遠に鬼のままだという意味であろう。

台湾式葬式の場合、四十九日の停棺が必要であり、葬式の前に大量の「紙銭」や「念仏」、「供養」も必要なので、かなりの出費になる。「供養」にかかる費用の大きさは、以下の樹虹の反応から窺えるだろう。

「停棺？そうですね。お父様の御遺志は、停棺中に要する費用の三分の一を国防献金にして、三分の一を救済事業に使い、三分の一で葬儀をするやうにと言ふ事だつたんです。だから、私も出来るだけ、さう言ふ儀禮は省略して、出来るなら明後日にも告別式をやつて、早く葬りたいと思つてゐます」

樹虹が言うのはいうまでもなく、「日本式」の葬式である。「日本式」であれば、死者に必要な台湾式の「土葬」、「供養」などの儀式が不要となる。しかし台湾の伝統的觀念においては、儀式の省略は死者への軽侮を表すと同時に、喪主

である息子も親不孝と見なされるのである。

一方、台湾式の葬式に関して、政府側はどのような姿勢を取っているか。昭和十一年七月二五日、総督府は「民風作興協議会」という会議を開いており。参加した軍民有力者は、在来宗教と慣習に対する以下のような方案を提出した。

一、迷信打破

地理師、巫覡、術師竝に死霊に関する迷信を打破すること。

二、陋習改善

聘金、媳婦子、殯殮、啼哭等の陋習を打破改善すること。

三、生活改善

婚姻、祭祀、葬儀、その他日常生活に於ける弊風を打破改善すること。<sup>(26)</sup>

この会議では、「死霊に関する迷信」、「殯殮、啼哭」、「祭祀、葬儀」などの旧習を打破する必要があると決議された。この会議について、蔡錦堂は、『同化の徹底』を要求するには、神社崇敬等による精神の改造のほか、『支障』である台湾人の精神の根底から抜き取らなければならない<sup>(27)</sup>と指摘している。つまり、同化を求める政府側は、「死霊に関する迷信」、「殯殮、啼哭」、「祭祀、葬儀」を「旧習」視し、皇民化運動の「支障」として排除すべきだという態度を取ったのだ。

皇民化運動に対し積極的に賛成支持の姿勢を取っている朝や樹虹も、「旧習」の台湾式葬式を皇民化運動の「支障」と見なすだろう。その一方、玉は「旧習」の台湾伝統を黙守している。朝は玉に「日本式の料理を習はせ」和服も着させた。しかし外見は変わっても、言語は変わらない。朝は玉に日本語を勉強することを強いたが、玉は「自分の頭悩が、

さう言ふ事を受け入れる餘地がない事を訴へ、頑固」に拒否し、そのため、日本語に拘っている朝も台湾語で玉と話さなければならぬ。言語のほか、前述したように、玉は纏足をしている。更に、彼女は「孟姜女」の物語を語る者であり、台湾信仰の媽祖や有応公を信じている。言い換えれば、「鄭一家」では、「玉」という登場人物を通して、台湾の信仰や習慣を語られるのである。

一方、台湾の伝統的慣習により、女性である玉が権力を持つている点にも注目したい。朝に代わって鄭家の家長になった樹虹は、鄭家の最大の権力を持つてゐるはずであるが、最終的には自らが望む内地式の葬式を行えなかった。その原因はもちろん周囲の建言にもあるが、母である玉の強い反対意見が決定的だったと言えるだろう。

玉は朝の葬式に関して「私は、私は絶対に反対だから。内地式など、内地式など」と叫び、はっきりと自分の意見を出して、樹虹に自分の意見を押しつけろうとする。ここからは、玉の母としての権力行使が見られるだろう。これに対して、「春秋」の主人公順の母は玉と正反対のタイプだといえよう。順の母は台湾に対しても、文句を出さずに、「どんな仕事をはかどらし」、「内地との季節の違いを、成程とうなずく」。順の母は「息子を手伝う」存在であり、息子のことについて、手伝うだけで、何も口から出さない。順の母の場合には、日本帝国主義下の「良妻賢母」政策に影響を受けているのであろう。日本人移民である順の母と比較すると、土着台湾人である玉の母としての強さがより一層明確に見えてくるだろう。

玉が母の権力を発揮したので、息子の樹虹は一つの倫理的矛盾に陥つたのである。次節では、その倫理の矛盾について述べる。

### 三―二 倫理の戦い

樹虹が日本式の葬式を主張するのは、父鄭朝の「萬事を内地式に」という遺言に従いたいからだ。樹虹は「どんな邪



魔が入らうが、父の遺志は実行しなければならぬ。一生を皇民化しやうと努力した父、(中略)内地式に葬つてやるべきである。それが自分の父親への誠意である」と心から思っている。

前述のように、台湾の伝統において葬式とは親孝行の表現の場であるのだが、玉は樹虹に「貴方が親不孝の見本にされてもいいとお言ひなの」と叱りつける。日本式か台湾式という選択を通して、樹虹は父と母への孝という二つの倫理関係の間を彷徨っている。「生きてゐる母への自分の心のつかひ方は、父へ親不孝な息子になるであらうか」と樹虹は悩んでいる。父が近代日本の代表であり、母が伝統台湾式の代表という点に注目すれば、樹虹は家庭倫理の矛盾ばかりでなく、民族文化の対立問題にも直面しているのである。

自分が妥協したら、E街の皇民化運動の先覚者としての生の父前の名はどうなる。又、自分對内地人の感情はどうなる。

この樹虹の言葉からは、日本式か台湾式かという単なる葬式の問題だけではなく、葬儀方式の決定をめぐる彼のアイデンティティが揺らいでいるとも読み取れよう。つまり、彼は父が代表している日本を選択するか、あるいは母が代表している台湾を選択するか、苦悩しているわけである。言い換えれば、彼は父の倫理と母の倫理の間で彷徨っているのだ。

ところで、吉本隆明は『共同幻想論』<sup>(28)</sup>で神話における倫理の重要性を語って、『古事記』のサホ姫とサホ彦の段に注目する。サホ姫は兄のサホ彦に従い天皇を殺すべきか否かという難題に直面する。サホ姫は樹虹と同じく、二つの倫理、つまり兄の倫理と夫の倫理の間で迷っているのである。吉本の考察によると、兄はサホ姫の出身部落を代表し、夫は統一された大和部落を代表し、サホ姫の倫理には国家の倫理が含まれている。サホ姫が苦悩する問題について、吉本は次



のように論じている。

サホ姫にとって〈倫理〉とは氏族的な共同規範に徹することもできず、部落的な社会での異族婚姻の習慣に徹することもできず、ふたつのあいだに引き裂かれたところにあらわれる。<sup>(30)</sup>

吉本隆明の〈対幻想〉というのは、吉本隆明によれば、それは「ベアになっている幻想」<sup>(31)</sup>であり、「いままでの概念でいえば家族論の問題であり、セックスの問題、つまり男女の関係である。そういうものは大体対幻想という軸を設定すれば構造ははつきり」<sup>(32)</sup>となるのである。吉本隆明は〈対幻想〉という図式でサホ姫とサホ彦の物語を読み、サホ姫の矛盾を見出した。

サホ姫の難題は遠く時空を隔てながらも「鄭一家」においても再演されていると言えよう。樹虹が台湾式の葬式と日本式の葬式の間で揺らいでいるときに、彼はサホ姫と同様の問題に直面していたのではあるまいか。樹虹にとって台湾とは「血縁」の〈対幻想〉であり、鄭朝の「萬事を内地式に」という遺言、さらには亡くなった日本人先妻の小夜とは「婚姻」の〈対幻想〉と整理することも可能であろう。台湾という「血縁」と日本という「婚姻」の〈対幻想〉の間でどのような選択をするか、両者の矛盾の中で樹虹は苦悩するのだ。樹虹もサホ姫のように、両方の「共同規範」に徹したいがゆえに、「ふたつのあいだに引き裂かれた」のである。

最終的に樹虹は台湾式の葬式を行なった。台湾式の葬式を選択したのは、周りの人々に説得されて伝統台湾を守ろうとしたからではなく、自ら納得できる理由をみつけたからだだった。それは、『すべてを内地式に』と言ったのは、精神の問題であつて、形式ではなかった」という理由である。つまり、樹虹は、台湾式という形式を重視せず、日本の精神に従うほうが大切だと考え、「葬式は台湾在来の宗教に従ひ、停棺四十九日。行列はすべてその宗教の順序に従ひます。

ただ、墓だけは、純内地式に建立します」と決めるに至る。

息子の樹一郎は父が伝統台湾との妥協に対して、それは「日本精神」に違反していないと考え、次のように語りかけている。

お父さんが、お祖父さんの葬式を内地式にしようとか、台湾式ではいかんとか考へたのも、これは案外つまらないことかもしれないな。三千年の歴史を持つてゐる日本全体を考へても、北の端から南の端迄、同じ風習を持つてゐるんぢやないんだから、台湾は台湾の風習を持つてゐてもいいぢやないかな。

樹一郎は樹虹と日本人先妻小夜の息子で、台湾人と日本人との混血児であり、前節で述べたように、台湾葬式などは打破すべきの旧習と考へていた。しかし樹一郎は台湾の伝統的宗教儀式は広い範囲の日本精神に含まれる可能性があるかと、考へ方を修正したのである。その一方で、彼は日本の植民地である台湾の儀式は将来に日本の風習の一つとなりうるという結論に達したのである。

樹虹は玉の主張している台湾式の葬式を選んだ。前述のように、吉本によればサホ姫が直面した難題はサホ姫の個人的体験ではなく、むしろ氏族（あるいは血縁）共同体から大和朝廷という統一部落共同体へと変わる転換期の物語を現わしていた。サホ姫が血縁集団を選ぶことは表面的には、統一部落を見捨ててしまう行為であるかのように見える。しかしその一方で、いったん血縁集団と分離したからには、統一部落の共同幻想はより強固になる。樹虹の場合もサホ姫と同じだろう。つまり、樹虹も伝統台湾という共同体から近代日本という共同体へと移行する転換期を迎えている。樹一郎の言葉は、樹虹は表面上に玉や台湾の伝統に妥協したように見えるが、実際は台湾が最終的に日本合体すると予言し暗示しているのである。

#### 四、結論——対立の立場から見た矛盾

前述したように、「春秋」と「鄭一家」の登場人物の単純化はこの二作品共通の特徴である。さらに、日本人の物語にしても、台湾人の物語にしても、物語の舞台は台湾である。

「春秋」では、順は「日本国民アイデンティティ」である「百姓魂」を台湾の土地に植えるために移民して来て、帝国の延長の可能性を見出す一方、順の母は鎮守様不在による故郷日本との切斷に不安を抱いている。

「鄭一家」では、日本式葬式を行なう父鄭朝の遺言が原因で、伝統台湾式葬式を主張する母玉と息子樹虹との間に生じた衝突を描いている。樹虹は父及び自分の日本同化の理念を選ぶか、あるいは母の伝統台湾の慣習を選ぶか、という難問に直面し、「日本」か「台湾」かという共同体の選択の問題でもあった。最後に樹虹は台湾式を選んだが、彼の息子樹一郎が言うように、台湾の風習を日本風習の一つと見なすことには、台湾の最終的日本化を信じていたのであろう。

「春秋」と「鄭一家」とを対照すると、二作品の中に類似する対立の構造が見られることがわかる。「春秋」では順と順の母とが対立し、「鄭一家」では鄭氏父子と玉とが対立し、この対立が二つの物語の中心的テーマなのである。そしてこの対立とは日本と台湾との二つの共同体対立とも言えるだろう。順と鄭氏父子は日本の帝国主義政策に賛成する台湾居住者の代表であり、順の母と玉は日本及び台湾土着に対し幻想を抱いて抵抗する居住者代表である。この対立関係には帝国主義と植民地問題という深刻な矛盾が潜んでいる。

移民も皇民化運動も当時の日本政府が台湾を植民地統治するための政策であった。日本の領台からこの二作品が発表される一九四一年まで、四十六年が経過している。だがこの二作品は一見日本の植民政策が成功したかのようでありながら、実は同化政策には限界がある点も示唆しているのだ。順や鄭氏父子から見ると、植民同化政策は成功すると考えている。

これに対し、順の母は能久親王という植民地台湾の官製神社を拒否し、故郷の鎮守様の不在を嘆いて、自分と故郷との切斷を悲しんだ。順の母から見れば、結局、台湾という植民地は故郷たりえず、移民政策により台湾を日本化するの夢にすぎないのである。

伝統台湾にこだわる玉も、男性二代家父長が推進する日本への同化を拒否した。伝統台湾は皇民化運動という植民地政策で変えられず、台湾の伝統は玉の纏足のように解こうとしても解けないのだ。

日本人の物語にせよ、台湾人の物語にせよ、二つの物語の内に潜む矛盾は同じだ。植民地政策により台湾の日本への同化が確実に進んでいる一方、土着共同体の論理に立つ者にとってはできない部分も残り、順や鄭氏父子と順の母や玉との間に生まれる矛盾は、同化の進行に比例してより大きな抵抗を生み出すのである。小熊英二は植民地政策に対する受容と排除の状況を考察していたように、受容は「国民教育、国内法適用、国民参政権」であり、排除は「旧慣温存、植民地自治」だと述べている。<sup>(33)</sup>「春秋」と「鄭一家」における受容と排斥とは、日台民衆の日常生活で生じていた現実的問題なのである。日本人だけでなく、台湾人も同じように、さらに下層民だけではなく、エリート層も同じように、受容と排斥の矛盾に苦しんでいた。「春秋」と「鄭一家」とは、このような日本統治期末期の台湾における同化政策の困難さを、日常生活における受容と排斥の物語なのである。

## 五、今後の課題

「春秋」と「鄭一家」は同じ年に『台湾時報』で発表されたが、編集者がこの二作に対する反応は違う。「春秋」の掲載月の『台湾時報』において、編集者は「坂口氏の小説は移民部落の人々を真率に描いて感動させてばかりでなく、移民政策にも考へさせられ」た<sup>(34)</sup>と「編集メモ」に記している。が、「鄭一家」の掲載する九月号の編集メモに、編集者は「編集メモ」に何も語らなかった。坂口自身も「鄭一家」は無視されていると語ったことがあった。ここで見られるの<sup>(35)</sup>

は編集者の冷たい態度だけではなく、坂口もその冷淡さを気になることである。

『台湾時報』からの冷たい反応に対し、『台湾文学』は「鄭一家」について賞賛していた。例えば楊逵は「台湾文学問答」<sup>(36)</sup>で「鄭一家」を高く評価し、黄得時も「輓近台湾文学運動史」<sup>(37)</sup>で「鄭一家」を言及した。

ここで注意したいのは、皇民化運動の限界を示す「鄭一家」は当時の厳しい検閲から逃げられたが、『台湾時報』から冷たい態度を示し、坂口は「鄭一家」以降の小説は二度と『台湾時報』で発表する事はなかったということである。その後、坂口の小説はほぼ『台湾文学』で発表された。

この一連の事実は何のことを示しているだろう。前述のように『台湾時報』四月号において、移民政策を批判するのは「春秋」のみならず、ほかの文章もある。つまり、「春秋」で批判する移民政策の限界は政府も意識し認めていることである。しかし、「鄭一家」は同化政策の皇民化運動を批判している。本稿で示しているように、「春秋」も「鄭一家」も受容と排除を語る物語であるが、二作は違うテーマを扱うので、違う反応が現し、作家の行方も影響するのである。今後の課題として、『台湾時報』で現した「皇民化運動」の態度と「鄭一家」の内容を検証したい。この検証を通して、「鄭一家」はどのように『台湾時報』の政治態度と合致しながら皇民化運動を批判することを明らかにし、「鄭一家」や坂口を再評価したい。

## 注

- (1) 『台湾時報』昭和十六年 四月号
- (2) 『日本統治期台湾文学 日本人作家作品集 第五卷』所収 中島利郎、河原功編 緑蔭書房 一九九八年
- (3) 『台湾文学』第二卷第三号 昭和十七年七月一日『台湾文学』
- (4) 尾崎秀樹『旧植民地文学研究』勁草書房 一九七一年 P198

- (5) 尾崎秀樹『旧植民地文学研究』勁草書房 一九七一年 P.199
- (6) 垂水千恵『台湾文壇の中の日本人―坂口樗子と台湾人作家』『台湾の日本語文学』五柳書院 一九九五年 P.134-135
- (7) 垂水千恵『台湾文壇の中の日本人―坂口樗子と台湾人作家』『台湾の日本語文学』五柳書院 一九九五年 P.127
- (8) 垂水千恵『台湾文壇の中の日本人―坂口樗子と台湾人作家』『台湾の日本語文学』五柳書院 一九九五年 P.127
- (9) この点は以下の編集メモからもうかがえる。「緊迫した情勢とは、何を指し、何を対照とするかは、もはや日本国民の常識である。南方政策遂行の基地たる本島に在住する六百萬の皇民、果たして覚悟はよいか」(二月号)、「南方圏を中心とする世界的情勢、(中略)本島上空、不連続線の落ちつきなきは六百萬島民を緊張の坩堝に逃げ込んで止まない」(三月号)、「南支の文化工作に就て現知を熟知の五氏を煩し、座談會を開催して豫想される泰・佛印文化工作への示唆とした」(四月号)、「我々が南方に関心をもつことはよこ」(九月号)
- (10) 『台湾時報』昭和十六年 六月号 P.153
- (11) この年の『台湾時報』において「南進」という言葉が初めて登場している。
- (12) 中島利郎「坂口樗子著作年譜」は「春秋」を「台南農業移民の話」とする。これに対し『外地』の日本語文学選①南方・南洋／台湾(黒川創編集)の解説は、豊福村を「台中州北斗郡の村」と記す。『台湾時報』一九四二年四月号に、坂口は豊福村に関して注を付けなかった。実際に当時の台中州には「豊里村」という移民村がある。一方、当時の台南州には、春日村・栄村の二つの移民村がある。さらに実在の「豊里村」には九州からの移民が多いという点から、小説主人公の熊本出身という設定も合致し、九州出身の坂口も当時台中に住んでいた。故に、台中州の「豊里村」をモデルとして小説「豊福村」を作り出した可能性が高いであろう。移民村に関しては張素玢『台湾的日本農業移民―以官宮移民為中心』国史館二〇〇一年を参照。
- (13) 小説において、山本は順の姓。山本家の長男が「春秋」に登場するのは、順の母が台湾に渡る前に雪子先生に訪ねる場面である。
- (14) 『農業の継承と参入―日本と欧米の経験から』酒井惇一ほか著 農山漁村文化協会刊行 一九九八年 P.11
- (15) 同上
- (16) 同上
- (17) 『台湾時報』昭和十六年四月号

- (18) 『台湾時報』昭和十六年九月号 P.2212 掲載。犬飼仁也著。内容は花蓮吉野村という日本人移民村の問題である。
  - (19) 『日本人の海外活動に関する歴史的調査』第十二冊・台湾篇・第一分冊一九四八年 P.170
  - (20) 同上 P.169
  - (21) 菅浩二の考察によると、明治二八年五月二八日に能久親王は近衛師団を率いて台湾北東部に上陸し戦闘を始めたが、抗日武装勢力以上の主敵は「この島に蔓延していたマラリア・赤痢・コレラなどの風土病」であり、病魔は親王をも襲った。十月二十二日に「台南に無血入城したが、その時には既に親王のご病状は相当進んで」、おり、「二十三日には、前月着任したばかりの台湾副総督兼南進軍司令官高島鞆之助（元陸相）が、お見舞いに訪れるが、拒絶され」たことから、親王の重態が想像できる。「従軍の神職及び僧侶による御平癒祈祷が続き、二十七日には樺山総督が親王のご病床に『御任務の御完了』を言上したが、遂に十月二十八日、親王は台南の民家で薨去された。御歳四十九」であった。菅浩二著『日本統治下の海外神社―朝鮮神宮・台湾神社と祭神―』弘文堂 二〇〇四年 P.241-242
  - (22) 前掲 菅浩二著 P.243-244
  - (23) 同上
  - (24) 能久親王は植民地で亡くなった皇族であり、「この経緯をもつ皇族を祭神にすえた例は、蒙疆軍参謀であった北白川宮永久王が演習中死亡した時、昭和十六（一九四一）年に蒙疆神社に祀られた例があるだけで、極めて異例なことだという。またそうした祭神がその地域全体の祭神とされたのは台湾だけ」であった。本康宏史著「台湾神社の創建と統治政策―祭神をめぐる問題を中心に」『台湾の近代と日本』所収、檜山幸夫編 中京大学社会科学研究所 二〇〇三年
  - (25) 同上
  - (26) 『台湾地方行政』二卷八号 昭和十一年八月 P.140-141
  - (27) 蔡錦堂著『日本帝国主義下台湾の宗教政策』P.101 同成社 一九九四年
  - (28) 吉本隆明著『共同幻想論』参照。角川文庫 平成八年一八版
- 『共同幻想論』では自己幻想・対幻想・共同幻想を経て国家幻想が形成されるまでを論じる。文庫本の解説で、中上健次は『共同幻想論』が「国家は白昼に突発する幻想化された性なのだと言した (P.332)」と指摘する。中上の言う「性」とは対幻想を意識しているだろう。吉本隆明も『自著を語る』で『共同幻想論』に言及し、対幻想とは「共同幻想的な言語と自己幻想

的な言語を繋げる」もの、言い換えれば、対幻想というのは、自己幻想と共同幻想の間にある渡り橋であると語っている。吉本隆明著『吉本隆明 自著を語る』p.162 株式会社ロッキング・オン 二〇〇七年六月

- (29) 『古事記』で吉本隆明の注目を引くのはサホ姫をサホ彦の段である。ここで簡単にその内容を紹介する。サホ姫が天皇の后となつたときに、兄のサホ彦は妹に「天皇と兄がどちらが愛しいか」と聞いたら、サホ姫は兄だと答えた。すると、サホ彦はサホ姫に刀を渡し、天皇を殺して二人で天下を治めようと言つた。このことを知らない天皇はサホ姫の膝で寝、しかし、サホ姫はなかなか天皇を殺せずに、涙をほろほろと落とした。天皇はサホ姫の涙に触れて驚いて起きた。天皇は佐保から雨が降り始めそして蛇に首を巻かれたという夢を見たと后に告げた。サホ姫は驚いて、事実を天皇に告げた。事実を聞いた天皇は怒り、サホ彦を撃つことを命じる。そのとき妊娠していたサホ姫は兄を思い、サホ彦のところに逃げ出した。そしてサホ姫が御子を生んだあと、その御子を天皇の使者に預け、天皇のところに送ってくださいと頼んだ。天皇は御子を受け入れ、后を愛しいという気持を表した。が、サホ姫は天皇の気持ちを断り、最後に兄が殺されるとき兄と一緒に殉死した。

- (30) 前掲吉本隆明著『P.208-209』

- (31) 同注111 P.25

- (32) 同上

- (33) 小熊英二『日本人』の境界 沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』新曜社 一九九八 p.11

- (34) 同注1 P.148

- (35) 楊逵『台湾文學問答』『台湾文學』2:3 一九四二年

楊逵はこの文章で「鄭一家」を絶賛する。中では次のようにも語っている。「先日、作者にお會ひした時、氏は、この作品について、〃無視してゐるので二百枚位に書きかへやうと思つてゐる〃と旨告白された」。中の「作者」・「氏」は坂口を指す。

- (36) 同上

- (37) 得時『晩近台湾文學運動史』『台湾文學』2:4 一九四二年